

宮本三郎の油彩画《家族》の裏から新たに発見された作品 《裸婦》を初公開します

宮本三郎の油彩画《家族》（1957年）は、1976年度に愛知県文化会館美術館が収蔵し、現在の愛知県美術館に引き継がれてきた作品です。キャンヴァスが二枚重ねてあったことから、昨年、表のキャンヴァス《家族》を剥がしたところ、下のキャンヴァスは1937年に制作され、同年の二科展に出品された所在不明の《裸婦》であることが判明しました。

今回、修復を終えた新発見の《裸婦》を4月1日（金）から愛知県美術館で開催される2022年度第1期コレクション展で初公開します。



宮本三郎 《裸婦》 1937年 油彩、キャンヴァス 106.4×106.4 cm

1. 発見の経緯

- ・ 2021年7月、コレクション展に出品する作品調査のため、当館学芸員が、収蔵庫において宮本三郎の《家族》を点検。



宮本三郎 《家族》 1956年
油彩、キャンヴァス 106.4×106.4cm

*1976年度に愛知県文化会館美術館が購入

- ・ 《家族》のキャンヴァスが二枚重なっていたため、状態調査をおこなった上で剥がしてみたところ、1937年の年記がある裸婦を描いた作品が見つかる。
- ・ 文献や当時の絵葉書から、下の絵が1937年の第24回二科展に出品された《裸婦》であることが判明。
- ・ 当時の画像（絵葉書）と比較すると黒絵具の部分が白いカビによって覆われている。
- ・ 下の絵《裸婦》に関して美術館は所有権を持っていなかったため、宮本三郎のご遺族から受贈し、今年度美術館が収蔵。
- ・ 木枠から剥がした上の絵《家族》は、新たな木枠を作り、張り直した。
- ・ 作品状態が悪かった（カビ痕が全面にある等）ため、愛知県立芸術大学修復研究所協力のもと、修復をおこなってきた。

2. 《裸婦》について

マティスや安井曾太郎の感化を受けた戦前の宮本三郎の特徴が現れています。第24回二科展に《牛牽く女》《蚊帳》とともに出品されていますが、これまで《蚊帳》以外は所在不明でした。1937年以後、この作品が展覧会などに出品されていたかどうかは不明ですが、1956年の《家族》が《裸婦》の上に貼られたキャンヴァスの上に描かれたとすれば、この作品は65年間隠されていたこととなります。

〈参考〉

宮本三郎について

1905（明治38）年、石川県小松市に生まれ、1974（昭和49）年、東京都で没。川端画学校で藤島武二に学んだ後、光風会に初入選し、その後は二科会で活躍しました。戦中には戦争美術の中心的存在として優れた描写力を発揮して帝国芸術院賞などを受賞、戦後は熊谷守一らと二紀会を結成して同会を中心に活動。裸婦や花、舞妓などを主題に、写実を基礎に華やかな画風を展開しました。

愛知県文化会館美術館は油彩画《家族》の他、1982年に素描8点（女性像3点、裸婦4点）を購入し、裸婦の素描1点を受贈しています。

3. 2022年度 第1期コレクション展

会 場：愛知県美術館 10階展示室6

会 期：2022年4月1日（金）—7月3日（日）

（4月29日からは企画展「ミロ展——日本を夢みて」と同時開催

開館時間：10:00—18:00 金曜日は20:00まで（入館は閉館30分前まで）

休 館 日：毎週月曜日

観覧料金：一般500（400）円 高大生300（240）円 中学生以下無料

※（ ）内は20名以上の団体料金

※4月29日以降は企画展「ミロ展——日本を夢みて」のチケットでも御覧いただけます。

4. お問い合わせ先

電話（052）971-5511（愛知芸術文化センター代表）

- ・発見の経緯や作品について

企画業務課 平瀬

- ・修復について

美術課 栗名

- ・コレクション展について

美術課 古田

- ・デジタル画像の提供依頼について

企画業務課 田村

※画像ご利用にあたっての注意

宮本三郎の作品は著作権の保護期間内です。

画像使用に関しては日本美術家連盟にお問い合わせください。